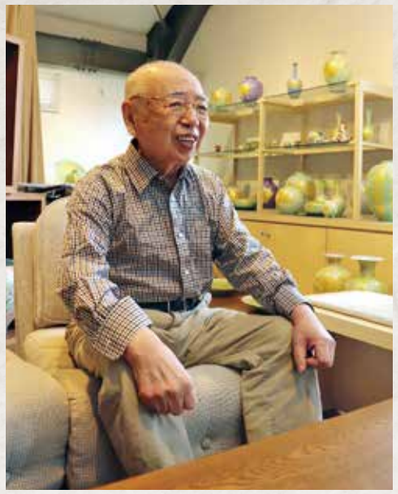
時代を切り拓く小松の作家たち

Interview

活躍する2人の作家に
作品づくりに対する思いや
今後の抱負などについて伺いました。

時代に合わせて新たなものを生み出すことで伝統は続いていく



吉田美統さん

高堂町生まれ。錦山窯三代。2001年に国指定重要無形文化財「釉裏金彩」保持者（人間国宝）に認定。

この仕事に就いたときはちょうど不況で、職人でも新しいものづくりをしていかなければならないという風潮がありました。私もデザイン的なものに挑戦していたこともあります。

そんな中、人間国宝の加藤土師萌（はじめ）氏の遺作展で「釉裏金彩」の作品に出会い、感銘を受けました。釉裏金彩とは、金箔や金泥を施した上に釉薬をかけて焼き付ける技法で、私は九谷焼ならではの具象的な表現とデザイン的な表現を融合させた新たな釉裏金彩の制作に挑みました。

独自の世界を創り上げ、かつ伝統を守るためには、自ら革新していくことが不可欠です。時代を捉え、変化を受け入れることで、九谷焼の新たな可能性が生まれるのではないでしょうか。

吉田さんは金箔を薄紙に挟み、医療用はさみで切ることで微妙な曲線を表現することに成功しました。▶

この土地だからこそ生まれる作品がある

27歳までは陶芸を学んでオブジェを制作していましたが、心境の変化があり、器を作り始めました。作品づくりにおいて、私は常に造形を重視しています。現在取り組んでいる「真珠光彩」という技法は、九谷焼らしい五彩は一切使わず、真珠のような「光」そのものを加飾として取り入れています。色を使わないからこそ、作品の形が際立ち、ごまかしがきかなくなります。

作品の「質」を求め、これだけ突き詰めた仕事ができる理由の一つは、この地域に住んでいるから。作家の幅が広く、質が高いのはこの地域の強みです。そんな環境で技を共有しながら、今後も新たなことにチャレンジしていきたいです。

◀中田博士「真珠光彩 壷」個人蔵

中田博士さん

高堂町生まれ。2009年、第56回日本伝統工芸展で新人賞を受賞。2015年、第23回日本陶芸展で特別賞を受賞。

KOMATSU KUTANI

新たな美との出会いへ

明治150年 特別展 工芸の冒険

3館同時開催

市内3会場で九谷の若手作家や日本工芸史を彩る作家の作品などを紹介。九谷焼の世界を手始めに、様々な「工芸」の魅力をお楽しみください。

会期　9月29日土～11月18日日

1 東京国立近代美術館工芸館移転連携事業 か・た・ちをめぐる冒険

2020年に石川の地に移転する東京国立近代美術館工芸館所蔵の美しくユーモラスな作品を厳選し紹介します。

会場　本陣記念美術館

三代宮永東山「立方体の会話」▶東京国立近代美術館蔵

2 きらめく色の冒険 ―錦山窯と吉田美統の仕事―

「釉裏金彩」の技法を極めた吉田美統。錦山窯の歴史を絡めながら、これまでの仕事を振り返ります。

会場　博物館

吉田美統「釉裏金彩芙蓉文鉢」博物館蔵▶

3 若き陶芸家たちの冒険 ―九谷NOW―

色・かたちにこだわり制作する若手陶芸家14人の意欲作を展示。九谷焼の「今」を伝える作品と出会えます。

会場　錦窯展示館

北村和義「線描色絵金彩チョウ」個人蔵▶

休館日　月曜日（10月8日は除く）、10月9日（火）
開館時間　9時～17時（入館は16時30分まで）
入館料　一般500円（3館共通、こまつミュージアム・パス利用不可）
高校生以下無料、障害者手帳をお持ちの人と介助者１人まで無料

ギャラリートーク　学芸員が見どころを解説！

◎本陣記念美術館　10月6日（土）、11月4日（日）いずれも11時～、14時～
◎博物館　10月13日（土）、11月10日（土）いずれも10時～
◎錦窯展示館　10月13日（土）、11月10日（土）いずれも14時～
※予約不要、入館料が必要です。

関連行事

スペシャル講演会「素材とかたち」

とき　11月11日（日）14時～15時
ところ　市民ギャラリールフレ
講師　中島晴美（陶芸家、多治見市陶磁器意匠研究所所長）
定員　100人（当日先着順）
参加費　無料
問　石川県文化振興課　☎076・225・1371

トークセッション

東京国立近代美術館工芸課　花井久穂主任研究員と九谷焼若手作家による工芸トーク。

とき　10月28日（日）16時～
ところ　松雲堂
定員　50人（当日先着順）
参加費　無料
問　博物館　☎22・0714

陶房見学と絵付け体験

錦山窯と周辺の陶房を散策・見学し、九谷焼の絵付けを体験するバスツアーです。

とき　11月7日（水）9時～15時
集合場所　博物館
定員　20人（先着順）
参加費　3,000円（昼食・絵付け代）
申し込み　10月10日（水）から博物館　☎22・0714

伝統工芸制作体験ワークショップ 九谷焼のお皿に絵を描こう

とき　11月10日（土）13時～14時30分、14時30分～16時
ところ　市民ギャラリールフレ
定員　各15人（先着順）
参加費　1,500円（送料別途）
そのほか　作品は乾燥させ焼成後発送します。
申し込み　石川県文化振興課　☎076・225・1371

特集 こまつ九谷焼 作家たちの挑戦

360年以上も続く九谷焼
小松では、良質な「陶石＝土」が採れます
豊富な「松＝木」は、かつて薪窯（まきがま）の燃料となりました
そして、優れた技術を持つ「作家＝人」がいます
それら3つの要素がそろうこの地は「九谷焼」を支える重要な地域です
伝統を受け継ぎ、未来へつなぐ作り手たちの挑戦は、今も続いています

問い合わせ 博物館 ☎22・0714

九谷焼のはじまり

加賀前田家三代前田利常公が三男利治に分藩した大聖寺藩で、1655（明暦元）年ごろから約50年の間、色絵磁器が焼かれました。この時期に作られたものを「古九谷」といい、多彩な色と大胆な意匠が特徴の日本を代表するやきものです。

▲古九谷色絵鳳凰宝盡図大鉢
本陣記念美術館蔵

再興九谷と陶石の発見

江戸時代後期になると、藩内各地で再びやきものの窯が興ります。これを「再興九谷」と呼び、小松では若杉窯、小野窯、蓮代寺窯などがありました。

1811（文化8）年に若杉村の林八兵衛と島原出身の陶工・本多貞吉が花坂村で良質の陶石を発見し、磁器焼成に成功したのが若杉窯の始まりです。1816（文化13）年には藩の直轄となり、翌年には「若杉陶器所」として量産化の体制が取られます。そこでは、磁器・陶器から色絵・染付、日用雑器まで、多くの器種が焼かれました。後に窯は八幡に移りますが、1875（明治8）年まで再興九谷の窯の中で最も長く続きました。

これらの窯では名工たちが多数輩出され、それに伴い、加飾の分野で様々な上絵付けの技術が発達。伝統的な和絵の具だけでなく、赤絵・金彩、洋絵の具などの導入により、九谷庄三に代表される絢爛（けんらん）豪華な作品が生み出されました。

▲若杉窯 色絵絵変八角小皿 市立博物館蔵

PICK UP ジャパンクタニの隆盛

明治になると「九谷焼」は藩の支援を失いますが、輸出によって一層の発展を遂げます。その背景には、石川県下の貿易商人の活躍があります。九谷窯元「松雲堂」を営んだ松本佐平は、陶工でありながら、商人として商品の売り込みだけでなく、産地に情報を伝え、輸出向けの商品を作らせるプロデューサー的な役割も果たしました。こうした技術と販路拡大によって、九谷焼は「ジャパンクタニ」として欧米で人気を博し、1887（明治20）年には陶磁器で輸出額の第1位を占めました。

▼松雲堂 大阪支店 1881年

▶松本佐平

産業としての九谷

九谷焼業界は、海外への輸出と並行して北前船などの船便や鉄道によって全国に販路を拡大。明治20年ごろには陶画の分業化を図り、産業としての体制を整えると同時に、中央から著名な作家を招き、画工の養成にも力を注ぎました。こうして培われた高いデザイン性と、優れた技術を武器に、九谷焼は輸出向けから国内向けへと販路を転換することができました。製品の多くは贈答品や美術品が占め、九谷ブランドを築いていったのです。

職人から作家へ

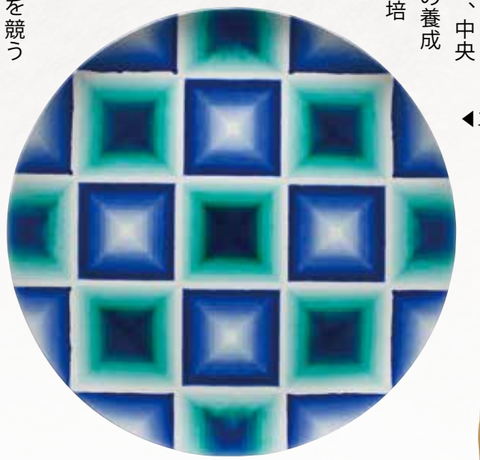
大正～昭和には、工芸作品を競う全国規模の博覧会や展覧会への出品が相次ぎます。また、古九谷の色の再現に成功した名工・初代徳田八十吉の高い技術に魅せられ、様々な作家が九谷の地を訪れています。こうした交流により、作り手の意識が職人から独自の個性的な表現が求められる作家へと変化していきました。

二代浅蔵五十吉は、形体・釉薬・意匠に創意工夫を重ね、造形的な作品で、1996（平成8）年、九谷の世界で初めて文化勲章を受章。

三代徳田八十吉は、「彩釉磁器」という釉薬によるグラデーションの表現で、1997（平成9）年、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されています。

また、吉田美統は「釉裏金彩（ゆうりきんさい）」の技法で、2001（平成13）年、同じく人間国宝に認定されています。

これら3人は、九谷焼の伝統を土台に、工夫や改良を加えて、新たな表現を極めた作家たちといえます。



◀三代徳田八十吉「耀彩大皿 石畳」
市立博物館蔵

二代浅蔵五十吉「釉彩瑞鳥の譜飾皿」市立博物館蔵▶

KOMATSU KUTANI